

3. ^{123}I -IMP と SPECT を用いたてんかん症例の検討

河村 正 村瀬 研也 西山 泰由
 山本 昌也 最上 博 伊東 久雄
 片岡 正明 石根 正博 飯尾 篤
 浜本 研 (愛媛大・放)

発作間歇期のてんかん患者 29 人に IMP-SPECT 検査を実施し、脳の三次元的情報を得てその有用性について検討した。部分発作および二次的全般化 22 例では 3 例は正常の分布パターンであったが 18 例では低集積が認められててんかん焦点と考えられた。そのうち 9 例は X-CT で正常であった。コントロール不良の一例で IMP 集積部位が約 4 時間後のスキャンで集積低下となった。全般発作 7 例ではけいれん性発作 3 例は広汎な集積低下を示したが、非けいれん性の 3 例では正常の分布パターンであった。また臨床的に全般発作と診断されたもので、部分発作から二次的全般化したと考えられる 1 例が IMP で明らかとなった。

4. ^{123}I -IMP SPECT によるてんかん焦点の脳血流の検討

戸上 泉 平木 祥夫 村上 公則
 上田 裕之 竹田 芳弘 木本 真
 橋本 啓二 新屋 晴孝 栗井佐知夫
 青野 要 (岡山大・放)
 小林 清史 庄盛 敏廉 (同・脳代謝)

部分てんかん患者の発作間歇期において、同時期に EEG と IMP-SPECT を施行し、てんかん焦点部位の脳血流の状態を検討した。

1) てんかん焦点部位での局所脳血流量は、検査時における脳波上の発作発射の出現状態により多様な変化を示した。すなわち、発作発射が出現していない症例では血流減少、発作発射が活発に出現している症例では血流増加の傾向が認められた。

2) 発作間歇期といえども、焦点部位における局所脳血流は発作活動の出現状況によって微妙に変化している可能性が考えられた。

5. 脳シンチが有用であった Sturge-Weber 症候群の一例

加藤 卓 周藤 裕治 謝花 正信
 勝部 吉雄 (鳥取大・放)

Sturge-Weber 症候群 (SWS) の脳シンチにおいて著明な集積像を認めた一例を報告する。本症例は 1 歳男児で鼻正中部に単純性血管腫を持ち、数度の痙攣発作を認めた。脳波で患側の基礎波の徐波化があり、CT scan にて石灰化像を伴う脳萎縮、血管造影で脳静脈系の異常を認めた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA による脳シンチ delayed image で左側の頭頂葉～側頭葉～前頭葉にかけて集積像を認めた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -RBC による血液プール scan においても、前述の脳シンチの集積部にほぼ一致して、びまん性の集積を認めた。これらの集積部は SWS の病変部を反映していると考えられた。

6. 心電図同期心プール SPECT による左室容積・LVEF 計測の試み (基礎的検討)

望月 輝一 篠原 功 外山 貴士
 (愛媛県立今治病院・放)
 藤原 康史 (同・内)
 村瀬 研也 安原 美文 石根 正博
 河村 正 飯尾 篤 浜本 研
 (愛媛大・放)

心電図同期心プール SPECT にて左室容積を測定する際に多くの因子に影響を受けるが、それらのうち、次の因子について、どの程度の影響を及ぼすのかを検討した。cut off level でどれくらい容積が変わるか。カウント (情報量) の大小、測定断面、容積の大小でどの程度の影響があるか。LVEF ではどうか。結果は cut off level 10% に対し左室容積は 20~30% と大きく変化したのに対して、LVEF は 3~4% の小さな変動であった。カウントの大小、測定断面、容積の大小による影響は、軽度であった。